**意思伝達が苦手な障がい者のアセスメントと評価　第2回「個人とそれを取り巻く世界全体のアセスメント」01190802wtj**

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| シート＃ | シートタイトル | 小見出し | 要点　「」はテロップ |
| P1  左下 | 生活をアセスメントする視点 | ■「個人」「環境」「個人⇔環境」の3つの視点から | 利用者のアセスメントは、個人、個人を取り巻く環境、そして個人と環境の相互作用の3つの視点から見ていくことが大事になる。  特に、「利用者と利用者の関係、利用者と支援者の関係、それを見ている支援者のアセスメント、利用者と地域社会の人たちとの関係」をきちんと見ていくことがとても大事になる。 |
| ■Well-beingの支援とbeingの支援 | 生活の中で見るアセスメントは、 Well-beingの支援、今の状態よりもよりよく生きる支援、そして beingの支援、安心・安全、生命活動や健康状態ということになるが、「生活面と健康面を併せて見ていくことがとても大事」になる。 |
| ■生活は人それぞれ⇒個別性 | 生活はひとそれぞれの個別性にある。  アセスメントはその利用者にあわせたものが使われているか。ベースは同じかもしれないが「一人ひとりに合ったアセスメントが開発されてくる必要がある。そういう視点で見ていくことが大事」になる。 |
| ■生活の全体性⇒支援で分断しない | 支援で生活の全体性を分断していないか。相談支援事業のサービス等利用計画があるが、これと施設の個別支援計画がリンクしているか。 |
| ■生活は不得意より得意なことを中心に営まれる | 「私たちは得意なことでマイナス面を補っている」といえる。「得意なことがなければ、自信もできないし、生きいきと生きていくことはできない」。利用者の得意なところを伸ばしていく、あるいは利用者の生活が得意なところを中心に営まれているという視点で、もう一度生活をアセスメントすることを考えていただきたい。 |
|  | 「「個人」・「環境」・「個人と環境を取り巻く関係性」の3つの視点からアセスメントすることが大事」になる。 |
| P1  右下 | 環境に視野を広げて生活全体から考える | はたらく場 | 活動をする場、社会参加をする場と言い換えてもいい。 |
| その他社会資源 | 問題は社会資源にどうつながっているか。  「「自立」とは、一人で自分ができるようになるということより、社会の資源をどう活用できるかということ。つまり、社会の資源に依存しながら私たちは生きているが、この依存状況を社会資源とどれだけつなげていくか？というところが自立のポイントになる」と思う。  私たちはソーシャルワークをしているので「社会と個人を結びつけていくことが大事」。 |
|  | 「本人を取り巻く生活のあり方を大きくとらえれば、社会関係や生活資源はどんどん広がっていくが、単純に、福祉施設の一つのクラスやグループだけで見ていれば、小さく閉ざされた世界になりかねない」。  「「本人と環境をどうとらえるか？」という視点を一回とらえなおしていただきたい」と思う。  もう一つ大事なのは人生における視点で、「過去・現在・未来につながっていく人生の流れの中で、一人の人間を支援していくという視点も欠かせぬ視点」で、そういったこともアセスメントに入れていく必要があるかと思う。 |
| P2  左上 | 利用者のニーズや課題は人と環境の相互作用 |  | 医療モデルから生活モデルへ、というのが今の障がい福祉の大きな流れである。  環境因子と個人因子が、心身・身体機能、活動、参加という機能の中で、実際に相互作用として動いていく。  この環境の要因の中で、私たちは生きているし、活動のレベル、社会（活動）のレベルといったものが個人の自立を支えている、ということも含めて、全体的に見ていくことがとても大事だと思う。 |
| P2  右上 | ICFを活用した利用者把握 |  | 私たちの個人の抱えている背景要因として、環境と個人の因子がある。 |
| 環境因子 | 態度的環境とは、文化や風習やその地域における人々の行動様式のようなもの。 |
| 個人因子 | 個人の信条も個人因子に入る。 |
|  | 環境因子や個人因子が背景にあり、私たちは個人の状況を考えるが、その上に健康状態がある。 |
| 機能・構造障がい | ハンディキャップを補っていくことを視野に入れる。リハビリの分野でもある。 |
| 活動制限 | 私たちはそこ（機能・構造障がい）だけを見るのではなく、ハンディキャップや疾病を持ちながら、生活者として行動している。しかし、様々な要因がその生活の活動の幅を狭めていたり、本人が望むような生活ができなかったりしている。それが活動制限。 |
| 参加制約 | もう一つ考えなくてはいけないのは、その生活は、社会参加などの、地域や社会での位置づけがある。  「「エンパワーメント」という言葉があるが、その人が自己を発揮して自分らしさを取り戻すことについては、社会参加まで含めて考えないと難しい」。  そして、その「役割などが本人の主体性を生み出し、一個人の自立・尊厳につながる」。 |
|  | このように相互の活動の末に、本人の望む暮らしがある。ICFの考え方をぜひアセスメントの中でも取り入れていただきたいと思う。  特に、「現在できていること・できること、このストレングスの視点をきちんととらえて、何をアセスメントするか？というと、その人の可能性をアセスメントする。その可能性を未来に投げて、私たちはそこに向かって一緒に共に寄り添いながら支援を展開していく」ということになる。  その意味で、本人の望む暮らしは決してできないものではなく、何によって疎外されているのか、何によって制限されているのか、環境因子や個人因子、そして機能・構造障がい、疾病の状況などを踏まえながら、社会を変えてくことや、その生活の環境を変えていくこと、こういうことも視野も入れられるアセスメントではないと、その人の意思決定支援や自己実現にはつながっていかないと思う。  そう考えていくと、私たちは、「個人に目を向けるのではなく、個人と社会、個人と人とを含めた環境の中で、その人がその場面で活動していることを側面から支援してくことがとても重要」であることがわかってくる。 |
| P2  左下 | 締めの一言 | ●できないことではなく、できていること、できることに着目して、できることの範囲を広める | 範囲を「広げれば広げるほど、生活に対するアセスメントは、支援者を中心に、その個人を中心に拡大していくはずのもの」である。 |